

胃癌の病理学的過小診断に関するご報告

国立国際医療研究センター病院において、早期胃癌の内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）を実施した患者さん（当時70代、男性）について病理学的過小診断を行っていたことが、癌の再発によって判明いたしましたので、下記のとおりご報告いたします。

記

2013年2月上旬、ESDにおいて胃癌を病理学的に「再発リスクがある非治癒切除で追加治療（手術）が推奨される（根治度C）」と診断すべきところを、「再発リスクが極めて低い治癒切除で追加治療（手術）は不要である（根治度A）」との過小診断を行いました。そのため患者さんに対しては本来実施すべきであった外科手術の提案を行わず、根治度Aとの病理判定に基づいた外来での定期診察を行いました。その後、5年間再発の所見はなく、当院への通院は終了し、それ以降は患者さんの御希望により紹介元のクリニックでの経過観察となりました。

胃癌のESDから5年11ヶ月経過後の2018年12月、患者さんは腹部膨満感を訴えて、精査を目的に他の医療機関を受診され、がん性腹膜炎の疑いと診断され、同医療機関より当時の病理検体の提供依頼がありました。その後、同医療機関から病理診断の過小評価の指摘がなされ、当院においても再度標本の見直しを行ったところ、病理の過小診断を確認した次第です。なお、2019年7月現在、患者さんは同医療機関にて治療を継続されています。

患者さんおよびご家族には以上の経緯をご説明いたしました。今回の件に関し、患者さんおよびご家族の皆様に多大なご心痛をおかけいたしましたことについて、心よりお詫び申し上げます。

本件発生当時、当院では病理専門医が単独で診断をし、その結果の報告を行っておりました。現在は複数人の病理専門医による病理診断を行っており、誤りのないように努めております。当院といたしましては、本件の発生を踏まえて真摯に反省し、二度とこのようなことを起こすことがないように再発防止に努め、最善で適切な医療を皆様に提供できるよう、職員が一丸となってより一層努力して参る所存であります。

本件に関するお問い合わせ

国立国際医療研究センター 広報企画室 広報係

[TEL] 03-5273-5258（直通）

[Email] press@hosp.ncgm.go.jp